公益社団法人 福岡貿易会
FUKUOKA FOREIGN TRADE ASSOCIATION

福貿ニュース 秋

～ 福岡貿易会情報誌 ～

第 63 号

＜トピックス＞

P2　グレイターベイエリア視察団報告（香港、広州、深圳）
P9　＜寄稿＞九州電力株式会社 都市開発事業本部 副部長 総合企画グループ長 池田 健一 氏
「グレイターベイエリア視察に参加して」

P12　第 85 回　福岡貿易会ゴルフコンペ
P13　山九株式会社　福岡支店　支店長　徳永 崇志 氏
「ゴルフコンペ優勝挨拶」

P14　福貿グローバル塾（インド編）・少人数ゼミ開催報告
P17　＜寄稿＞ 黒崎播磨株式会社　代表取締役社長　江川 和宏 氏
「製造業のインド進出について」
P18　＜寄稿＞ 山九株式会社　九州エリア開発営業部　部長　清水 昇 氏
「インドの物流事情について」
P19　＜寄稿＞株式会社 Kyulux　生産管理部　杉谷 祐輔 氏
「インドゼミを受講して」
P20　＜寄稿＞株式会社福岡銀行　グローバルソリューション部　副調査役 中村 将貴 氏
「インドゼミを受講して」

福岡貿易会会員リレーエッセイ
P21　株式会社やまやコミュニケーションズ　代表取締役社長　山本 正秀 氏
「スペース X　～ロケット打ち上げ見学～」
P23　丸紅株式会社　九州支社　九州支社長　花田 多雄 氏
「おみやげの達人になりたい」

ガンバってます、会員企業！
P25　三宗貿易株式会社　代表取締役　渡辺 久也 氏
「オーガニック一筋、輸入販売、国内製造、そして、Japan Organic を世界に」

P27　RKB 毎日放送、下田文代リーダーズストーリー出演

P28　コラム「貿易ニュース今昔物語」②

P30　新会員のご紹介

P31　国際ビジネス相談（無料）のご案内

P32　福岡貿易会からのお知らせ

グレイターベイエリア視察団報告（香港、広州、深圳）

●視察概要

・期　間：2025 年 9 月 15 日(月)～20 日(土)
・訪問先：香港、広州、深圳
・目　的
①グレイターベイエリア(以下、GBA)における最新技術等の視察及び都市開発の現状視察
②訪問先各社及び政府、団体との意見交換
・参加者：平塚団長含む全 11 名(事務局含む)

※以下文章では、主に視察団メンバーからの所感や現地での質疑応答の内容をピックアップしてご紹介いたします。

三井物産(広東)貿易有限公司

同社の事業はじめ広東省および広州市、GBA の現状についてご説明いただき、その後、質疑応答・意見交換を行った。

～参加者の所感等～

・2025 年版「Global Innovation Index」で GBA が世界 1 位に選ばれた背景には、香港の金融・法制度ノウハウを中国本土側に展開する戦略があるということを伺えた。
・国家主導でエネルギー消費削減の取り組みを推進する中、特に広東省では先進的な環境技術・スマートエネルギーに積極的に取り組んでいると聞き、中国の技術力や革新的な事業を改めて知ることができた。
・広州は、世界的に知られる製造拠点としての強みに加え、旺盛な国内消費が健全な成長サイクルを形成しているという点は新たな視点であった。
・現地ではオフィス供給量が過剰で、新築オフィスの価格が高く設定されないとのこと。さらには、人手不足や資材価格の高騰といった影響はほとんどないとのことであった。

古川総経理、松井部長との集合写真

広州国際生物島にて自動運転体験

広州市政府および WeRide 社の協力により、自動運転タクシー、バスの乗車を体験。

～参加者の所感等～

・周囲を検知する複数のカメラや LiDAR、レーダー等のセンサー群を組み合わせ、スピード制御や車線変更をリアルタイムで制御していた。
・交通混雑地域での安定走行性能に加えて、渋滞対応や障害物回避精度も実証レベルで高いと感じた。
・広州では既に自動運転が実現している一方で、海外市場を視野に入れ、都市側のシステム整備を待たずとも導入可能とするため、車載カメラとセンサーを用いたエッジコンピューティング方式の戦略を展開しているとのこと。
・日本での自動運転導入にあたっては、法規制や社会受容性、インフラ整備など乗り越えるべき課題が多いと感じた。

自動運転バスの前で

広州市人民政府との座談会

広州市人民政府 黄副秘書長はじめ、外事弁公室の方々との意見交換を実施。

～参加者の所感等～

・福岡市との姉妹都市提携に基づく長年の交流を背景に温かく歓迎された。さらには、互いに港町として国際貿易の機会に恵まれている点や美食の街として知られている点など、多くの共通点を有していることが強調された。
・広州市が取り組むグリーンエネルギーや持続可能性への注力、ハイテクや革新的企業への支援などは、福岡にとっても参考となる開発モデルであると感じた。
・EHang などの先進モビリティ企業の紹介もあり、都市および行政が新技術導入に積極的である姿勢が感じられた。
・普段は絶対にお会いすることが出来ないような広州市政府の方々との座談会ができ、大変貴重な経験ができた。

黄副秘書長はじめ広州市政府の皆様と

EHang【億航智能技術有限公司】

現在改装中である同社施設内ショールームにて同社の歴史や特許についての説明をはじめ展示機体を見学。その後、実機のデモ飛行を見学。

～参加者の所感等～

・eVTOL（垂直離着陸型機体)に試乗したが、機体内部は想像よりも狭く、実際の飛行を想定すると圧迫感を覚えるほどであった。
・訪問 2 週間前には、ルワンダでのエアタクシー実証飛行成功の実績があり、日本国内でも 5 都市で実証実験が進んでいるとのこと。
・同社が世界の関連特許の 50％以上を保有し、制御システムやバッテリー規格において業界標準を主導していることを学んだ。
・航続距離 300km を超えるものや高所の火災対応に利用できるものもあり、近い将来、当たり前の光景になっているのだろうと感じた。
・国家をあげて推奨している事業であると実感した。日本も同様の事業には積極的に介入してもらいたいものである。
・都市ごとに取得が必要となる厳格な認証制度について説明を受けた。先行企業である同社は、すでに複数の都市で認証を得ており新たな都市においても信頼を確立しやすいという優位性を持つ。そして、このプロセスは、試験飛行や営業許可の獲得を加速させ、健全な成長サイクルを形成している。

＜関連ニュース＞

本年 9 月 30 日、深圳市交通運輸局は、「低空経済の質の高い発展を促進するための若干の措置に関する実施細則」を発表した。

この細則により、eVTOL（電動垂直離着陸機）事業などを展開する企業に対して、最大 3, 000 万元の補助金を支給するというもの。詳細はジェトロ HP をご参照ください。
https://www.jetro.go.jp/biznews/2025/10/c8282ba3fedc9757.html

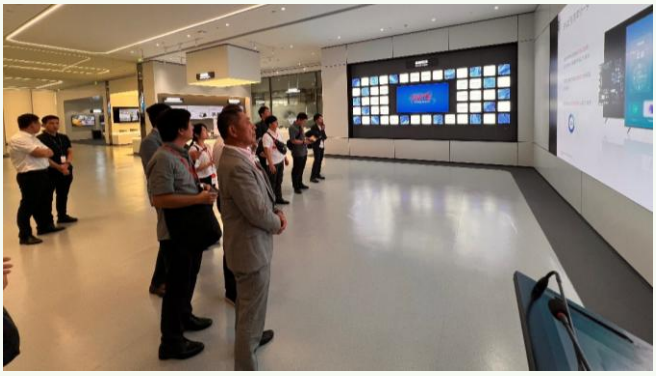
視察中(下段：デモ飛行の見学)の様子

CVTE【广州视源电子科技股份有限公司】

CVTE のショールームにて、同社の歴史や取り扱う製品などを視察。その後、隣接するテレビの製造工場にて、製造ラインを見学。

～参加者の所感等～

・かなり大規模でありながら、多種多様な基盤が作られていることに驚いた。
・意外にも労働集約的なラインもまだ残っており、今後どう変わっていくのかも興味深い。
・世界中のテレビの 3 分の 1 が同社の基盤を使用しており、世界市場シェアが 28%を超えている点や教育向け電子黒板の世界市場シェアは 20%を超えている点など、世界市場における勢いは凄まじいと驚嘆させられた。
・教育分野への ICT 導入は、福岡の学校教育や遠隔教育の高度化に活用できると感じた。
・日本市場においては「MaxHub」のブランド名で事業を展開し、現地では一社の代表的なパートナー企業がアフターサービスや修理を統括し、他の販売代理店を管理している。この仕組みにより、製品の市場適合性が大きく向上し、納期短縮やアフターサービスの迅速化が実現している。
・日本からフラットテレビの工場が無くなっていくのにも頷けるものがあった。



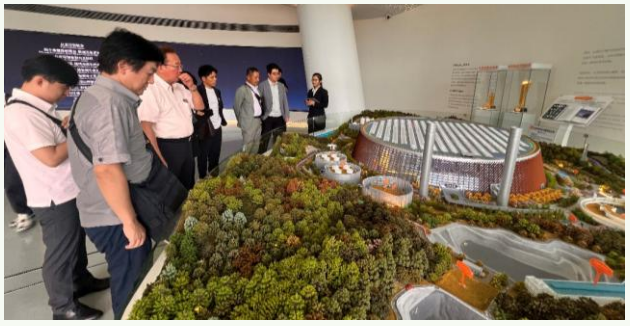
視察中の様子

竜崗エネルギーエコパーク

廃棄物焼却発電所におけるごみの搬入から発電までの一連の流れをご説明いただいた。

～参加者の所感等～

・「年間 385 メガワット(MW)相当の発電能力を有する」との数値説明があり、この規模感は地域の電力需要の一部を安定供給するだけでなく、ピークシフトや系統補助サービスにも寄与し得ることを示していると感じた。
・全工程 24 時間体制で中央制御室により監視され、空気品質基準は EU や国際基準を上回る厳しさで設定している点が特徴的であった。
・同施設は、スポーツ・教育といった公共施設群と汚水処理・残渣処理を組み合わせた複合型の地域エネルギー施設でもあり、敷地内で発生する有機系廃棄物や下水汚泥を原料としたバイオガス化設備や熱回収プロセス、さらにはそれらを活用した発電プラントの運用モデルについても説明を受けた。
・単なる廃棄物処理施設にとどまらず、屋上にはランニング用のトラックを備え、内部にはカフェや書店などを併設している。これらにより、教育・啓発・交流の場としても活用されている。この市民参加型の環境政策の推進は、福岡の持続可能な都市運営に向けて多くのヒントを得ることができた。



視察中の様子

BYD【比亜迪股份有限公司】

同社ショールームにて、同社の歴史や製品ラインナップについてご説明いただいたほか、BYD のブレードバッテリーと三元系(NMC)バッテリーとの耐久性比較の実演を見学。その後、試乗を通じて最新技術を体験した。

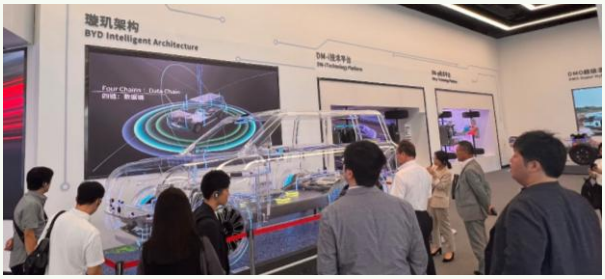
～参加者の所感等～

・同社がリチウム電池から始まった会社であり、その後モノレールや EV に事業を拡大していった歴史、4 万件近くの特許数、100 万人の雇用を創出していることなど、初めて知ることばかりであった。

・その場で 360 度回転する車種や水上を走行可能とする試作車、走行挙動を音楽とシンクロさせる演出機能など、製品差別化を狙った技術や UX(顧客体験)志向の設計には(EV 市場)世界トップシェアを誇る同社の核心に触れた気がした。

・福岡においても、EV の導入促進や充電インフラの整備が求められており、同社の事例は政策立案の参考になると感じた。特に、公共交通機関への EV 導入は、環境負荷の低減や都市ブランドの向上に寄与している。

また、バッテリーの再利用やエネルギーマネジメント技術は、福岡のスマートシティ構想において重要な要素であり、中国の EV 普及政策や企業の技術力は、福岡の脱炭素戦略に多くの示唆を与えていると考える。



上段：視察中の様子、下段：試乗時の様子

HKSTP【 Hong Kong Science and Technology Park】

HKSTP 内ミーティングルームにて、設立の経緯、今後の展望などをご説明いただき、その後併設されたショールーム(同施設に所属している企業のプロダクト)を見学した。

なお、HKSTP は、2001 年に香港特別行政区政府によって設立された研究・イノベーション拠点で、世界 26 か国から約 2,400 社が入居し香港のスタートアップの約半数がここに集積している。

～参加者の所感等～

・HKSTP が「技術実証(PoC)→実装→資金調達→海外展開」までを繋ぐワンストップのインフラを提供しており、外部企業にとって効率的にパートナーを見つける場となっている。

・香港に存在するユニコーン企業 18 社のうち、13 社が HKSTP でインキュベートしたとのことで、それと比較し、日本全体では 2025 年 9 月時点でユニコーン企業が 11 社にとどまっている。現地の活気に満ちた若いエネルギーにその秘密を思ったが、日本において同様の戦略を直接的に適用するのは高齢化社会等の課題から容易ではないかもしれない。

・HKSTP への企業進出や補助金支給など企業が事業をしやすい環境を構築し、結果として新規企業の誘致や世界トップクラスの IPO 数を達成しており、香港企業やテクノロジーがどのような支援の下で成長や発展をしているのか、その背景についてよくわかった。

・メインの収入がテナントの家賃であると仰っていたが、なる程であると同感した。

HKSTP について説明を受ける様子

香港ヤクルト【香港益力多乳品有限公司】

同社工場にて、製造ラインを見学した後、同社およびヤクルト製品の歴史ついてご説明いただき、質疑応答・意見交換を行った。

～参加者の所感等～

・同社の海外進出において、香港は 3 ヶ所目であり(1969 年創業)、その歴史に驚いた反面、国民に受け入れられ、愛されるようになるまでにかなりの苦労があったことが伺えた。
・ヤクルトの製造工程そのものの見学も有意義であったが、商品展開や創業時の苦労、マーケティングなどの話を伺い、試行錯誤をされているリアリティがあってとても興味深く聞くことができた。
・菌を東京から輸入し、香港で培養・凍結保存される体制は、品質管理の徹底を示しており、さらには、検査基準も日本と同様であり、現地スタッフの教育体制も整っていた。
・ヤクルトに飲み応えを求める国もあれば、たくさんの量を求めない国など、国民性に合わせた内容量で製造している点も新たな発見であった。

工場見学中の様子

植田総経理はじめ同社の方々と

三井物産(香港)有限公司

同社の事業はじめ香港の現状・市場の状況などをご説明いただき、その後、質疑応答・意見交換を行った。

～参加者の所感等～

・近年、香港では高級志向からコストパフォーマンス志向へと消費者のニーズが変化していることを伺った。そのため、福岡の地場産品や優れた技術も、今後、香港市場で展開できる可能性が十分にあると感じた。
・香港は生活必需品を中心に「輸入依存」が極めて高く、消費者は信頼性の高い日本製品を好む傾向があるとのこと。確かに香港では Made in Hong Kong のお土産を見つけるのが難しく、Bacha Coffee(シンガポール)やトワイニングやフォートナム&メイソン(英国)などの輸入ブランドに加え、街中でも日本や韓国などのスナック・飲料がたくさん並んでいた。このことから、香港がかつての工業都市から国際貿易都市へと転換したことも肌で感じることができた。
・香港は高い教育水準を誇っており、国際的にも非常に高い R&D 能力があることやイノベーション&テクノロジーセンターとして環境技術やフィンテック、AI、Web3、低空経済分野での研究開発を促進していることなどについても伺うことができた。
・今後の都市北部開発計画についての説明は興味深く、それが香港経済を刺激すると同時に、大湾区全体と結びつく中核的な役割を担うことが強調された。この動きは、日本企業にとっても新たな商機を生み出すものであり、建設業界のみならず、海外展開を志向する投資家にとって大きな可能性を秘めている。

企画業務部 村上部長、横山副部長との集合写真

菜鳥 Smart Gateway【Cingleot 社】

同施設は、最新の物流倉庫として、2023年より順次稼働。訪問時は業務時間の関係上、稼働中の状況は視察できなかったものの、同施設を全般的にご説明いただいた。

～参加者の所感等～

・AI による荷物の仕分けや IoT によるトラッキング、効率的な配送ルートの構築など、先進的な物流技術が使われているとの説明があったが、福岡においても、港湾や空港を活用したスマート物流の導入が求められており、菜鳥の事例は大変参考になると感じた。

・印象的だったのは、貨物のトレーサビリティ確保と処理速度の高さ、加えてピーク時におけるスケーラビリティ。これらは金融貿易港である香港が物流ハブとして機能するための重要な要素であり、地域間物流の遅延リスク低減や在庫回転率向上に直結していると感じた。

・人手不足や人件費高騰といった課題に対応するため、自動運転技術の導入にも積極的に取り組んでおり、次世代型の物流拠点としての可能性を示していた。

実用前の自動運転トレーラーヘッド

倉庫内視察中の様子

香港貿易発展局本部

同局は 1966 年に設立、50 以上の海外拠点を有し、国際的なプロモーションを行っている。当日は、同局の事業および GBA の歴史、これからの展望を中心にご説明いただき、その後、質疑応答・意見交換を行った。

～参加者の所感等～

・変わりゆく大湾区でのトレンドを体系的に聞けて有意義だった。

・香港が中国本土とのビジネスハブとして機能していることが明確になり、自由なモノの行き来や、データ・知的財産の交流が進められている様子を確認することができた。

・金融分野の「Asian Financial Forum」、医療分野の「Asia Summit on Global Health」をはじめ、クリエイティブやデザイン産業に焦点を当てた数多くの国際会議を主催している点が特徴である。これらのデザインインスパイアなどの展示会を通じた国際交流は、福岡のクリエイティブ産業にも応用できると考える。

・香港だけでなく世界各国で貿易展やイベントを精力的に実施しており、香港の魅力を発信することで香港企業に事業機会を提供し、香港の発展の一助を担っていると感じた。

意見交換中の様子

同局の皆様との集合写真

＜最後に＞

これまでに記載の通り、今回の視察において、香港・広州・深圳にて企業や団体計 12 ヶ所を視察させていただきました。訪問に際し、ご協力を賜りました皆様に改めて感謝申し上げます。
また、視察先調整のためにご尽力いただきました、各位に心より御礼申し上げます。

～視察先調整にご協力いただいた企業および団体等～
【中華人民共和国駐福岡総領事館】、【(独)日本貿易振興機構(ジェトロ)香港事務所・福岡貿易情報センター】、【香港貿易発展局 大阪事務所】、【三井物産(株)九州支社】、【(株)西日本シティ銀行国際部、香港駐在員事務所】、【NNR GLOBAL LOGISTICS (HK) LIMITED.「西日本鉄道(株)」】

今回、「グレイターベイエリア視察団」と称し派遣したものの、GBA の一部である香港・広州・深圳のみの訪問となり、若干の心残りを感じているメンバーも多かったのではないかと思っています。しかしながら、直接自分の目や耳で「見て」「聞く」経験ができたことで、9 月 15 日(出発日)まで抱いていたイメージや思いは 9 月 20 日(帰国日)には大きく変わっていたのではないかと感じています。

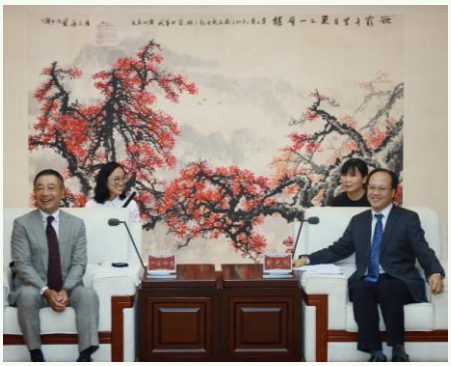
それほど、充実していたということが視察団各位からの振り返り(所感)および本視察における寄稿(次ページ以降に記載)をいただいた池田様(九州電力)の文章からも汲み取ることができ、本視察を企画・開催したことに意味があったと改めて感じることができました。

池田様はじめ参加者の皆様に心より感謝申し上げるとともに、この出会いを大切に引き続きの交流をお願いいたします。また、大型台風の香港直撃による暴風雨により、もし、日程があと一日ずれていたら、帰国できなくなるリスクもあった中、視察中含め大変お世話になりました、 (株)ハッピートラベルの松原様はじめ現地ガイドの皆様にも心より感謝申し上げます。

今後も当会の視察だからこそできる経験や体験を提供できるよう努力して参りますので、皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。

福岡貿易会　専務理事　平塚 伸也
業務課長　尾上 敬洋

当視察にご参加いただいた皆様の企業等 ※五十音順		
九州電力(株)	(株)シーブリッジ	(株)西日本シティ銀行
西部ガス都市開発(株)	西研グラフィックス(株)	日本国福岡県政府 香港事務所
西部ガスホールディングス(株)	正興 IT ソリューション(株)	福岡貿易会(事務局)



広州市政府座談会にて
（黄副秘書長と平塚団長）

EHang にて（展示機試乗）

羅湖口岸にて
（深圳→香港に歩いて出入境）

＜寄稿者＞九州電力株式会社　都市開発事業本部　副部長　総合企画グループ長　池田 健一 氏

「グレイターベイエリア（以下、GBA）視察に参加して」

今回、初めて福岡貿易会の海外視察に参加させて頂いたが、香港・深圳・広州の GBA という経済発展の著しい地域の現場を「見て」「聞いて」「触れる」視察となり、多くの刺激を受ける機会となった。また、九電グループの都市開発事業の推進にあたり、数年前に上海を視察（オフィス・ホテル・商業・インフラ等）したが、GBA と上海の相違点・共通点を認識できたことも、自身にとって非常に有意義な機会となった。

以下、視察を通じて感じたことを記す。

深圳市内。ナンバープレート 緑：EV、青：その他

BYD 本社写真（HP より）

本社隣の展示施設内。壁に特許掲示(数万件)

＜研究・製造・普及の推進力の高さ＞

今回、複数の先進的な企業を訪問したが、国家・行政の強力な支援を背景とした技術開発力、EV・電子部品等の製品生産力の高さが、予想を上回っていたというのが総括的な印象である。

例えば、BYD 本社がある深圳市では、EV 購入補助金に加え、公共交通機関への導入（EV バス・タクシー）、電動スクーターの普及などにより、EV の拡がりを目の当たりにした（現地ガイドの方から半数以上が EV と伺った）。EV とその他車両はナンバープレートで識別され、市民に対する意識付けも、普及の一因と感じた。また、BYD は、売上高 17 兆円の企業に急成長（2024 年/2021 年の売上高比は 3.6 倍）を遂げているが、従業員 100 万人（うち研究者 11 万人）の雇用、全工程の内製化が可能な生産体制など、高度な技術力と豊富な労働力という「人的基盤」が、原動力と理解できた。特に、内製化可能だが外部委託を積極的に活用するとの説明を聞き、自社での生産調整力を高める狙いに加え、コストの勘所を持つことで生産委託先への価格交渉力を高める狙いがあると思料する。

次に、広州市の広州国際生物島では、自動運転車両に試乗したが、スムーズな加速・車線変更・停止の行動、他車両や障害物等の危険察知・回避の行動、スマホアプリでの空調変更・停止場所指定等の操作行動を体験し、安全性・利便性の高さを感じた。関係者によると、膨大な運転データの取得・改善で、日本より 3～4 年技術が進んでいるとのことであった。一方で、一般公道での適用は、法令上の問題（事故時の責任の所在等）の解決が難しく、あと何年で導入という見通しは無いようであった。日本でも高速道路の特定区間での自動運転が進みつつあるが、法令面を考えると、日本や中国のみならず、世界的にも自動運転は「特定エリアに絞った形での普及」になると思料する。日本では、安全・安心を前提に、基幹物流の課題解決等を目指した着実な開発が良いと考える。

自動運転車両（外観）

自動運転車両（内観）

＜香港のプレゼンスの維持（不変）＞

香港がイギリスから中国に返還されて 28 年が経過したが、この間に中国本土からの関与が強まり、自由貿易等のビジネスの魅力が低下しているのではないかと推測していた。しかし実際は、現地の三井物産の方々との意見交換を通じて、一国二制度の維持（2047 年迄）や GBA 開発目標（2035 年迄に、ニューヨーク・サンフランシスコ・東京に匹敵する経済規模へ）の設定・推進から、更なる成長に向かっていると理解した。そして、日本との関係は、1,400 社以上の日系企業、約 2.3 万人が在留し、日本からの輸入総額は 4.3 兆円、訪日者数は 270 万人（2024 年は過去最高）などの交流から、重要かつ親密であると理解できた。また、香港では贈与税・相続税が無いと伺った。このことは、蓄積した富を子々孫々まで遺せるため、香港で事業を成功させ・事業を続ける根本的なインセンティブになると感じた。

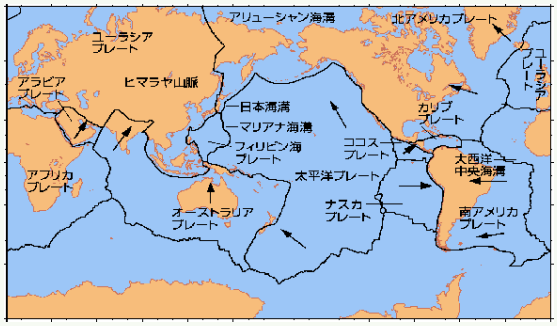
以上のような経済・法令等の側面に鑑みると、香港の持続的な成長は、今後も揺るぎないと思料する。

香港三井物産との意見交換

＜立地特性の違い（地震災害）＞

私自身、日本との違いを最も感じたのは、GBA では「地震災害が殆どない」という点であった。改めて地球のプレート位置を見れば、日本がユーラシア・北米・太平洋・フィリピン海のプレートに囲まれ、絶えず地震活動に注視し、巨大地震を想定した BCP・防災活動が当然なのに対し、プレート境界から遠く離れた GBA では、巨大地震への懸念が皆無に等しい。このことは、立地上の経済メリットが大きく、例えば建物・工場の耐震性確保、インフラ強靭化（交通網の複線化、港湾整備強化等）、リスク費用（地震保険等）がほぼ不要となる。また、現地企業やガイドの方の話によれば、今年 7 月の日本での巨大地震発生の予言を信じた方が非常に多く、地震を経験しない地域に住んでいることが背景と理解できた。

以上を踏まえると、今後、世界規模で、データセンター・半導体工場等の立地・誘致が進むが、日本においては、企業が抱えるリスク（稼働停止等）に加え、人が感じるリスク（恐怖感）に向き合い、十分な理解と対応策を持った取り組みが重要と思料する。



世界のプレート境界（気象庁 HP より）

また、視察中の建設現場を見ていると、作業足場や歩道への落下防護柵などの仮設材に、鉄ではなく竹が用いられていた（以前から聞いていたが）。これも地震が無いため、竹でも強度は十分で、しかも軽くて扱いやすい、ということかもしれないが、安全・人命に対する意識は十分でないと感じた。

香港市内。建物工事中

＜何が大切か（自問自答）＞

視察の振り返りとして、日本が世界の中で存在価値を高めていくには何が大切か、考えてみたい。*（寛大な心でお読み下さい）*

1 つ目は、人々を普遍的に幸せにする商品・サービスを生み出す「ものづくり」。スピードも大事だが、「安全・安心・高品質」が幸せの根幹と捉え、これに応える製品、食料品、建物などをつくり続けることが、競争優位に繋がると思料する。

香港市内スーパー。日本・韓国の生鮮品セール

2 つ目は、1 つ目で述べた「ものづくり」を考え、実践できる「ひとづくり」。このためには、世界・将来の展望を予想し、価値あるものは何か、見出す力を具備した人材が必要だが、「ひとづくり」は簡単ではない。様々な取組を重ねるしかないと思うが、行政・企業・団体が協力し、未来を託す人材に、世界に直に触れる学びの機会を提供することは、重要な取組の 1 つと考える。今回のような 20～30 代の方を含み、現地に精通した方と議論しながらの視察は大切にしたい。

以上 2 つを、自身の胸に刻もうと思う。

最後に、今回の視察にあたり、綿密に企画・準備を頂いた福岡貿易会の平塚専務理事、尾上課長を始め、現地状況を丁寧にご教示頂いた三井物産（香港・広州）の皆様、そして一緒に視察したメンバーの皆様には、楽しく、充実した学びの機会を頂戴した。

ここに深く感謝の意を表する。

香港・三井ハウスにて（みんな最高の笑顔！）
高波董事長を囲んで

九州電力株式会社
都市開発事業本部　副部長
総合企画グループ長
池田　健一

〒810-8720
福岡市中央区渡辺通 2-1-82
TEL：090-3476-4451　FAX：092-981-9052
URL:https://www.kyuden.co.jp

第 85 回　福岡貿易会ゴルフコンペ

●第 85 回ゴルフコンペ (2025 年 10 月 7 日)　福岡雷山ゴルフ倶楽部にて

「今年は晴れてよかった～」

「今日は 18 ホール回れそうやね」

朝、受付をしながら多くの方にお声掛けいただきました。

昨年の同時期同ゴルフ場開催の第 83 回コンペでは、雷雨によるハーフ終了を余儀なくされ、今回はスコアよりも天候を気にされた方が多かったのではないでしょうか。

秋晴れの最高の天気の中、女子プロのツアー(Sky RKB レディスクラシック)が今年初開催された同ゴルフ場でのプレーを堪能しつつ、最終 18 番では、神谷そらプロ(同大会優勝)をイメージして 2 オンを狙う方も。

(イメージと現実の差を埋めるのは次回以降への持ち越しとなったようです･･･)

プレー終了後には、コンペルームにて表彰式を行い、盛会のうちにお開きとなりました。

今回も、多数の賞品をご協賛いただきました皆様に心より感謝申し上げます。

次回は、来年春頃に 2 部制(1 部：コンペ、2 部：別会場にて表彰式兼懇親会)を予定しておりますので、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

●成績表

優勝した山九(株) 福岡支店 徳永支店長 →

総合順位	氏　名	OUT	IN	GROSS	HDCP	NET
優　勝	徳永 崇志	42	41	83	10.8	72.2
準優勝	道永 幸典	40	42	82	9.6	72.4
3　位	高丘 利勝	41	46	87	14.4	72.6

「ゴルフコンペ優勝挨拶」

この度は、歴史と伝統ある第 85 回福岡貿易会ゴルフコンペにおきまして、栄えある優勝という身に余る光栄を賜り、心より感謝申し上げます。このような素晴らしい結果を収めることができましたのも、ひとえに、共に白熱したラウンドを回ってくださった同伴者の皆様、そして常に的確な状況判断と温かい励ましで私を支えてくださったキャディーの方のおかげであり、この場をお借りして深く御礼申し上げます。皆様との出会いと、ゴルフというスポーツが持つ奥深さに改めて感動しております。

大会当日は、秋晴れの清々しい空が広がり、まさにゴルフ日和と呼ぶにふさわしい絶好のコンディションに恵まれました。しかしながら、実はこの 2 日前、私は 100km のウルトラマラソンという過酷な挑戦に身を投じておりました。残念ながら練習不足がたたり、55km 地点でリタイアという不本意な結果に終わってしまいましたが、その代償として、全身、特に膝から腿にかけての筋肉痛が激しく残る中でのゴルフコンペ参加となりました。正直なところ、スタート前は「今日は怪我をしないこと、そして何とかまっすぐボールを飛ばすこと」を唯一の目標とし、リカバリーラウンドのつもりで臨むことを決意しておりました。前夜の祝杯の余韻も手伝ってか、体のだるさも感じており、万全とは程遠いコンディションであったことは否めません。

しかし、いざ第 1 打目を放つと、ボールは惜しくもラフへと吸い込まれてしまいましたが、幸いにも 2 打目が十分に狙える位置に止まってくれました。この瞬間、私の心に不思議と落ち着きが戻り、そこから徐々に自分らしいリズムを取り戻すことができたのです。もちろん、ラウンド中、特にカップインしたボールを拾い上げる際に膝を曲げるたびに襲いかかる、あの強烈な筋肉痛には本当に苦しめられました。その度に「なぜこんな状態でゴルフをしているのだろう」と自問自答する場面もありましたが、同伴者の皆様の笑顔や、キャディーさんの「ナイスショット！」という声に励まされ、一打一打に集中することができました。

振り返れば、この肉体的なハンディキャップが、かえって私に「力まず、丁寧に、そして確実に」というゴルフの基本に立ち返るきっかけを与えてくれたのかもしれません。無理に飛ばそうとせず、常にフェアウェイキープを意識し、グリーン周りでは繊細なタッチを心がける。そうした堅実なプレーが、結果としてスコアメイクに繋がり、まさかの優勝という最高の結末を呼び込んだのだと実感しております。

今回の優勝は、私にとって単なるゴルフの勝利以上の意味を持つものとなりました。限界に挑戦したウルトラマラソン、そしてその直後のゴルフコンペという、二つの異なる挑戦を通じて、心身のバランス、そして何よりも諦めないことの大切さを改めて学ぶことができました。この経験を糧に、今後も仕事に、そして趣味であるゴルフに、より一層精進して参りたいと存じます。

最後になりますが、このような素晴らしい機会を設けてくださいました福岡貿易会の皆様、そして本日ご一緒させていただいた全ての皆様に、重ねて心からの感謝を申し上げ、私の優勝コメントとさせていただきます。本当にありがとうございました。

※11 月 9 日（日）の福岡マラソンにも出場しますので応援宜しくお願い致します。

山九株式会社
福岡支店
支店長
徳永　崇志

〒812-0051
福岡市東区箱崎ふ頭 4-5-9
TEL：092-632-0039　FAX：092-632-3988
URL:https://www.sankyu.co.jp

福貿グローバル塾（インド編）・少人数ゼミ開催報告

＜福貿グローバル塾(インド編)について＞

インドは 14 億人と世界最大の人口を誇るとともに、急速な経済成長を遂げており、さらには、2025 年に福岡でインド総領事館が開設されたこともあり、福岡からインドへのビジネスが進展する一助になることを目的に福貿グローバル塾(インド編)を開催いたしました。

①少人数ゼミ（インドゼミ）、②アドバイザーによる個別相談、③インドへの現地視察・市場調査の 3 本柱で構成しました。

インドゼミについては、本年 7 月から 8 月にかけて全 5 回のゼミを開催し、毎回、各分野に精通する講師からインドの法規制や商習慣、進出における課題・留意点などについてお話しいただくとともに、内容の理解を深め、各自のビジネスプランのブラッシュアップを図るため、講師やファシリテーター、受講生同士のディスカッションを行いました。

第 1 回インドゼミにおいて、在福岡インド総領事館のラムクマール総領事からは、「大企業はインドの市場の大きさを感じて、既にインドへ進出しており、中小企業の皆様にもインドの大きな可能性を感じて、ぜひ進出してほしい。九州はインドにとって大事な地域であり、インドの正しい情報を伝えていきたい。また、インドの経済成長率は 6.5%とインド市場は魅力的なので、ぜひインドに来て、実際に市場を見て感じ取ってほしい。」との挨拶をいただきました。

ファシリテーターを務めていただいた独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ) 九州・沖縄地域本部の古川本部長からは、群盲象をなでるの言葉を引き合いに出され、「昨年度は、九州において、インドビジネスに関して、ジェトロへの問い合わせが非常に少なかったが、1 年を経過してようやくインドに取り組む流れになってきている。インドを一つの国と捉えず、州を越えると違う国だという認識が必要であり、それぞれ民族が違うので、ビジネスの面では、どのように攻めていくのかを考えることが大事である。」と話がありました。また、インドゼミでは、毎回、講師の話を踏まえ、インド駐在で豊富なご自身の経験を元に、独自の切り口で議論を掘り下げることにより、受講生がインドへの理解をより深めるものとなりました。

ラムクマール総領事のご挨拶

ジェトロ
古川本部長

＜第 1 回インドゼミ:7 月 9 日開催＞

「インドビジネスのチャンスとリスク・工業団地への進出について」

【講師】

丸紅株式会社

次世代社会基盤事業部　事業開発第二課

プロジェクトマネージャー　豊田 崇史氏

インド市場の魅力は、高い経済成長率、人口ボーナス期が 2043 年まで継続見込み、主要な州は経済規模・水準でアジア各国の国家経済に匹敵する市場規模である一方、リスクとしては、他社との競争の厳しさや価格と品質のバランス、州法・連邦法の複雑・不透明な法規制、許認可手続き、土地取得の困難さなどがあるとのことです。

インドにおいて、工業用地を選定する際の留意点として、州営工業団地と民間工業団地のメリット、デメリットを比較した上で、ニーズに応じた工業団地を選択すると良いが、工業団地以外の私有地については、管理費等が発生せず、土地代も安価に抑えることが可能だが、インフラ敷設・接続などはすべて自社負担となるだけでなく、土地の権利問題が複雑な上、環境影響評価など必要な許認可はゼロから申請が必要など、リスクが高いため、インドでは避けるべきなど、工業団地への進出に関して、具体的に留意点などを説明いただきました。

丸紅 豊田マネージャーとのディスカッション

＜第 2 回インドゼミ:7 月 16 日開催＞

「インドの法規制や商習慣における留意点と進出のポイント」

【講師】

TMI 総合法律事務所

外国法事務弁護士　ビーラッパン・ビーラスレシュクマル氏

弁護士　白井 紀充氏

弁護士　山本 麻記子氏

インドの特徴として、多様性が共存しており、東南アジアと違い契約社会であることなどが挙げられ、インドへの進出においては、外資規制が中国や東南アジア諸国と比べて自由で、出資制限は一部の事業に限られ、独自にビジネスがしやすい環境とのこと。また、合弁等現地パートナーとの連携の際の留意点や労働法において連邦法と州法が大きく異なるとのことです。

さらに、トラブルを未然に防止する契約交渉のいろはとして、契約交渉、契約締結、取引の履行、トラブル発生時の対応のそれぞれのステップにおいて、実務的に何をすべきか、さらに、典型的なトラブル事例と対処法などについてもお話しいただきました。

TMI 総合法律事務所の弁護士とのディスカッション

＜第 3 回インドゼミ:7 月 23 日開催＞

「黒崎播磨から見たインド市場」

【講師】

黒崎播磨株式会社

代表取締役社長　江川 和宏氏

黒崎播磨のコアとなる強みは、グローバル事業展開、カスタマイズされた製品設計、高い技術開発力であり、地産地消をモットーとし、インドでの事業拡大の要因は、品質の良さ、納期を守る、アフターサービスであり、困ったことがあれば、お客様の相談に乗り、解決を助ける、日本企業は信頼されており、それが価値につながるとのことです。

インドに進出する際の留意点としては、現地パートナーのバックグラウンドチェックやデューディリジェンスの実施、マジョリティを取得するのか否か基本スタンスの決定などに

ついて、インドでのビジネス経験を踏まえて具体的な対応についての説明がありました。そして、インドビジネスを検討していて、まだインドに行ったことがない人は、まずは、実際にインドを自分の目で見て考えることが大事であるとのことでした。

黒崎播磨 江川社長との質疑応答

＜第 4 回インドゼミ:7 月 30 日開催＞

「インドへの輸出販売について」

【講師】

株式会社 **OREC**

海外営業部 アジア･**ASEAN**･オセアニアグループ

係長　クマル･ダルメンドラ氏

OREC が農業機器をインドで販売するに至った経緯として、社内のオーソライズにおいて、地理的･心理的な距離の遠さ、価格競争面での不安、治安や政治的な不安、暑さへの不安などが挙げられ難航したが、インドのお客様からの問い合わせを機に上司とインドへ出張し、各地域へアプローチすることで、取引先を獲得されたとのことです。

今では取引先も増えており、インド人であるクマル係長が考えるインドビジネス成功のための重要なポイントは、(1)インド人の社員、(2)長期的な目標、(3)スピード感、(4)実際にインドに行き、自分の目でインドを感じること、の 4 点をお話しいただきました。

OREC クマル係長の講話

＜第 5 回インドゼミ:8 月 6 日開催＞

「インドの物流事情」

【講師】

山九株式会社

九州エリア開発営業部

部長　清水 昇氏

インドの道路輸送事情として、悪路が多く、長距離輸送は道路によっては最大 3.5G を計測することもあり注意が必要で、振動計による路面状況や貨物影響調査、ドライブレコーダーによる輸送環境調査を行い、実態に即した輸送計画かつ余裕のあるスケジュールを組むことにより、荷物を守ることができるなど物流面での課題や対応策についてお話しいただきました。

また、山九がインドで駐在員事務所を置き、その後、現地法人を設立し、事業拡大を行っていく過程で様々なご苦労や乗り越えるための強い信念、さらには、現地でインド人を採用し、日本人とインド人が信頼関係を築くための取り組みなどをお話しいただきました。インドで大事なのは、日本人、インド人の友人を作ること、また、インドでは社員が孤立しやすいので、日本側からのサポートが必須とのことです。

グループディスカッション

インドゼミ終了後、現在、アドバイザーによる個別相談を行っており、来年 2 月初旬にはインド視察を行う予定にしています。

今回のインドゼミで講師を引き受けていただいた黒崎播磨 江川社長と山九 清水部長のお二人、受講生の Kyulux 杉谷氏と福岡銀行 中村副調査役のお二人に、寄稿いただいておりますので、どうぞご覧ください。（次ページ以降に掲載）

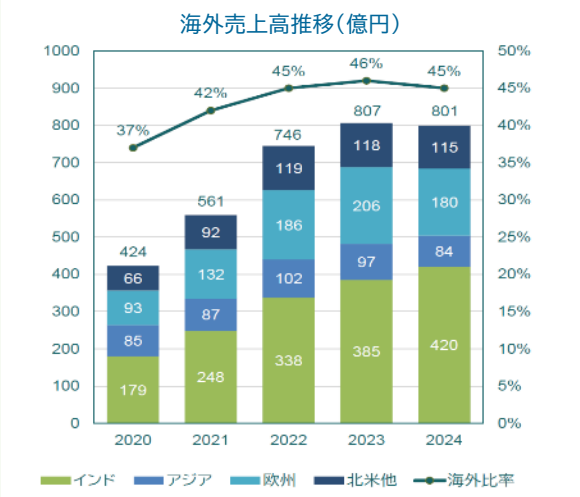
＜寄稿者＞黒崎播磨株式会社　代表取締役　江川 和宏 氏

「製造業のインド進出について」

皆さん、こんにちは。

当社は、北九州に本社を構える、鉄鋼やセメントメーカー向けの耐火物の製造・販売、工業炉の設計・製造、半導体分野に使われるファインセラミックスや建築用セラミックス製品を製造・販売する、総合セラミックス企業です。1919 年に創業し、100 年を超える歴史の中、一貫して日本、海外の製造業をお支えして参りました。鉄鋼用耐火物では売上高で世界第三位、現在東証プライム企業です。

製造・販売拠点は日本国内各地のみならず、インド、中国、欧州、米国、ブラジル等、多岐に渡ります。2024 年度、当社の海外売上高比率は 45%でしたが、その中でも、インドは 52%を占め、当社にとって最重要拠点の一つとなっております。



こうした背景と、私自身が、以前勤務していた日本製鉄時代から現在に至るまでの約 40 年間、一貫してインドビジネスに携わって来た経験から、本年 7 月 23 日に、福岡貿易会のグローバル塾にて、掲題のテーマでお話をさせて頂く機会を得ました。当日は、15 名近くの多業界からの出席者の皆さまへ、インドの政治・経済・文化に起因するインド進出の際の留意点をお伝えさせて頂きました。

その後のゼミ形式の討論、Q&A も活発で、私にとりましても大変有意義な時間でした。

＜インドのビジネスチャンス＞

インドは皆さまご存知の通り、人口 14 億人を超え、面積は日本の 9 倍の大国です。

本年の GDP は、日本を抜いて世界第 4 位となることが見込まれています。しかし、一人当たりの GDP は 2,480 US ドルと依然、統計データのある 184 か国中 122 位です。また、GDP に連動する鉄鋼生産量は、順調に増加しているものの、一人当たりの鋼材使用量は未だ 100kg 程度にとどまり、今後、先進国の標準とされる 500kg まで急拡大が予想されます。

即ち、インドは今後更に経済が発展し、あらゆる産業のビジネスチャンスがある国と言えます。

＜インド進出の留意点＞

他方、インドに進出する際には、幾つかの留意点を忘れてはならないと思います。例として、

- 中央政府と州政府で政策の食い違い、許認可が異なる場合がある。
- 多言語国家であり、ビジネスマンは英語に堪能だが製造現場は必ずしも英語を解さない。
- 地域により、気候・風土は大きく異なり、嗜好にも大きな地域差がある。
- カースト制度は法律で禁止されているが、依然として社会的な差別が存在する。企業の人事担当者は与える職種・職務について、出身地・名前から判断できるインド人が好ましいと思われる。

他にも様々な留意点はあるものの、政治・経済的に日本にとって大変重要な国であり、大きなポテンシャルのある国ですから、進出を考えておられる企業の方々には、信頼できるパートナーを選んで、積極的な展開を図られることをお勧めいたします！

黒崎播磨株式会社
代表取締役社長
江川　和宏

〒806-8586
北九州市八幡西区東浜町1-1
TEL：093-622-7224　FAX：093-622-7200
URL:https://www.krosaki.co.jp

＜寄稿者＞山九株式会社　九州エリア開発営業部　部長　清水 昇 氏

「インドの物流事情について」

最初に、インドへの進出を検討されている皆様に、講師という立場で私の経験、インド物流に関して話して欲しいと福岡貿易会様よりご相談いただいた際に、少し不安がありました。2004 年～2016 年にインドの駐在経験はあるものの、既に私の経験は劣化しているのではないか？みなさんのご期待にお応えできるのだろうか？

そんな折、現地法人設立に向けて準備していた 2010 年 3 月に書いた社内寄稿文をあらためて読み返してみることにしました。そこにはしっかり“インドの心得”が残っていました。当時のスタッフがあたふたしていた私にひとこと「インドは何が起こるか分からないから楽しいですよね！」この“ひとこと”をみなさんにお伝えできれば良いのでは、と思い今回の大役を引き受けさせていただきました。

一番右が筆者

＜インドゼミの受講生について＞

受講生のみなさんの眼をみて、とにかく生き生きとされていたのが印象的でした。まさしく新しいことにチャレンジしていくときに湧いて出てくる「わくわく」感に満ち溢れておられるのだと感じました。是非、苦難をも飲み込む勢いで突っ走って欲しいです。微力ながら応援させていただきたいと思っております。

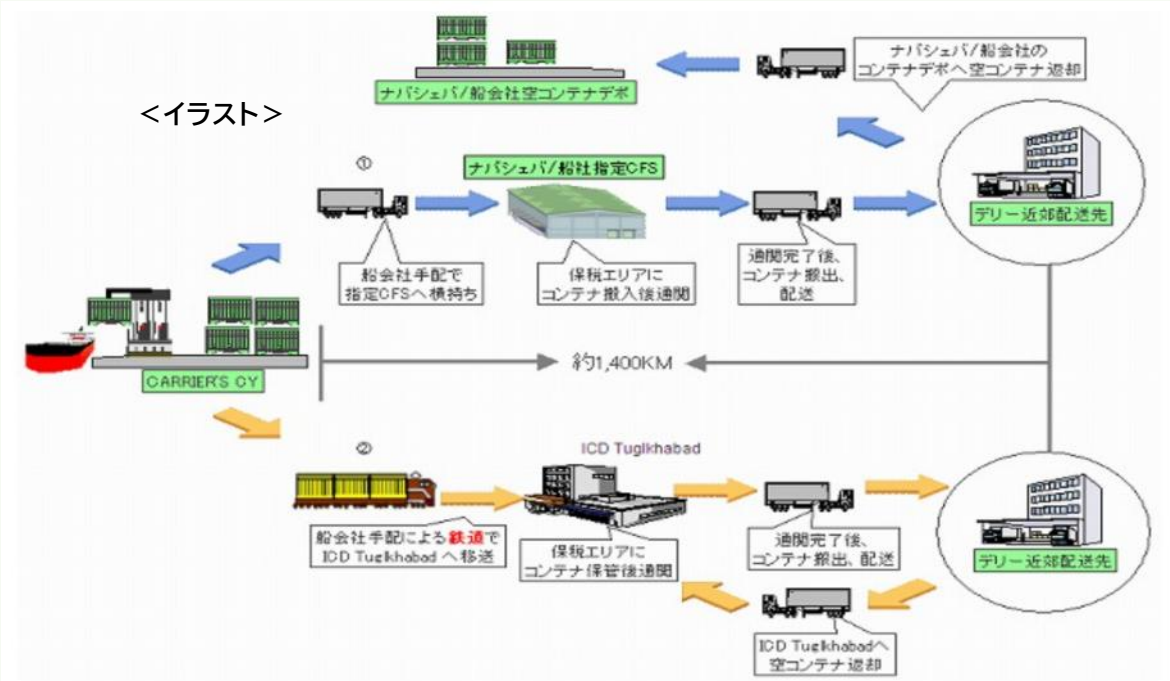
講演後の質問にもありましたが、インド進出には個の能力も必要ですが、組織のバックアップ体制が非常に大切だと今も思っています。「インドで孤軍奮闘する、任せる」のではなく、駐在員の方が「助けてくれる仲間がたくさんいる」と安心して前進できる環境作りが大事だと思います。

＜インド物流のポイント＞

今回のセミナーで是非覚えていただきたかったインド物流のポイントは、

1. コンテナ貨物の輸出入通関は CY 通関ではなく、CFS もしくは ICD に移動してから実施されること（以下イラストを参照ください）。
   ※ここで大半の遅延が発生します。
2. 国土も人口も日本の 10 倍規模のインドです。輸送距離も日本の 10km はインドでは 100km という視点が必要で、その内 10%は悪路と夜間は照明が少ない危険の多い暗闇での走行になることを忘れないでください。
3. 信頼できる物流会社を複数持って緊急時のバックアップ機能を持っておくこと。

＜イラスト＞



日系物流会社に何を依頼するのか？自社対応できる部分はないか？現地地場会社の実力は？他日系企業からの評判を参考にされることをお奨めします。まだまだ貧困差の大きい国でもあり、輸送には相当の時間、日数を要しますので、紛失、盗難リスクも当然のようにあります。輸送貨物保険以外の対策も大切になりますので、是非ご相談ください。

＜インド進出を目指す方へ＞

冒頭あいさつでも触れましたが、「インドでは何が起こるか分からない、正解がない国」というスタンスが大切です。いざという時に頼れるパートナー、社員の確保がインドでの事業成功の近道だと思います。広大なインド、「どこかに必ず正解がある」と信じて、突き進んでください。

最後になりましたが、このような機会をいただきました福岡貿易会の皆様、ファシリテーターとしてサポートいただきましたジェトロ古川本部長をはじめ、関係者の皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

山九株式会社 SANKYU
九州エリア開発営業部
部長
清水　昇
〒812-0051
福岡市東区箱崎ふ頭 4-5-9-4F
TEL：092-651-3930　FAX：092-651-3985
URL:https://www.sankyu.co.jp

＜寄稿者＞株式会社 Kyulux　生産管理部　杉谷　祐輔　氏

「インドゼミを受講して」

株式会社 Kyulux は、2015 年に設立された九州大学発のスタートアップ企業であり、有機 EL ディスプレイや照明に用いる次世代有機 EL 材料の開発に取り組んでおります。現在、当社では有機 EL 材料に使用する原材料の一部をインドから調達し、国内で製造した製品を海外のお客様へ出荷しています。近年、ディスプレイ業界でもインド進出の動きが活発化しており、当社とインドとの関わりは今後さらに拡大していくと見込んでおります。

そのような背景のもと、今後のインド関連ビジネスの参考となる情報やネットワークを得ることを目的に、今回のセミナーへ参加いたしました。

＜講師から得た実践的な学び＞

全 5 回のセミナーはいずれも内容が濃く、工業団地開発、進出企業の法務支援、現地製造・販売、輸出販売、物流など、毎回異なる切り口から学びを得ることができました。講師やファシリテーターの方々は、インド各地で多様な経験をお持ちでしたが、共通して「州ごとの法制度の違い」、「現地採用・契約の重要性」、「インドの人柄や文化の特性」、「市場の潜在的な魅力」について言及されており、インドビジネスを進める上で欠かせない視点であると実感しました。

特に、「インドを見るときは EU を見るように」というファシリテーターの言葉は印象的で、インドの多様性に対する見方が大きく変わりました。また、実際に現地で多くの困難を乗り越え、事業を立ち上げ・拡大されてきた講師の方々の話からは、大きな勇気と学びを得ました。さらに、「日本を豊かにする使命感を持って海外へ挑戦する姿勢」からは、海外進出の意義を改めて考えさせられました。

＜グループディスカッション＞

グループディスカッションでは、さまざまなインド進出のアイデアを共有でき、大変刺激を受けました。同じグループの皆様からは貴重なご助言をいただき、今後ぜひご一緒したいと思える心強い方々ばかりでした。インド進出を志す多様な参加者の方々と繋がることができたことも、本セミナーの大きな成果です。

今回のセミナーを通じて得た知見やネットワーク、さらには福岡貿易会の皆様のご支援を糧に、今後は当社のインドビジネスをより具体的に形にしてまいります。学んだことを実行に移し、先人たちに負けない成果を残せるよう、全力で取り組む所存です。

株式会社 **Kyulux**
生産管理部
杉谷　祐輔
〒**819-0388**
福岡市西区九大新町 **5-5**
TEL：050-3508-1264　FAX：092-834-9618
URL:https://www.kyulux.com

＜寄稿者＞株式会社福岡銀行　グローバルソリューション部　副調査役　中村　将貴　氏

「インドゼミを受講して」

この度は、福岡貿易会主催「インドゼミ」に受講生として参加する機会を賜り、誠にありがとうございました。全 5 回にわたる本講義では、インドビジネスに精通された講師陣より、法務、物流、輸出入実務、市場動向等、インドビジネスに関する幅広いテーマについて体系的に学ぶことができました。私自身、福岡銀行において海外展開支援の企画業務を担当し、目下、インド進出を検討されるお取引先企業に対する支援体制を検討しておりますが、大変有意義な時間となりました。

講義を通じて、インド市場の中長期的な成長可能性を実感できたとともに、進出に際しての複雑な法制度、州ごとの制度差異、物流インフラの地域的偏在、現地パートナーとの関係構築の難しさなど、現場で直面する具体的な課題を知ることができました。特に、現地での事業運営には、柔軟性と長期的な視点が不可欠であることを改めて認識いたしました。また、講義には多様な業種の方々が参加されており、参加者同士の意見交換やディスカッションを通じて、それぞれの立場からの多様な視点に触れることができ、インド市場への理解を一層深める貴重な機会となりました。

＜今後について＞

今後は、インド進出を志向されるお取引先企業に対し、より具体的かつ実務的な情報提供が可能となるよう、支援体制の構築と知見の蓄積を図りたいと考えております。また、製造業に限らず、食やサービス業など多様な業種が存在する九州地域の特性を踏まえ、インド市場との接点を広げるための支援策についても検討を進めてまいります。

今般、貴重な学びの機会をご提供頂いた福岡貿易会の皆様ならびに講師の皆様に、改めて深く御礼申し上げます。

株式会社福岡銀行
グローバルソリューション部
副調査役
中村　将貴
〒**810-8693**
福岡市中央区大手門 **1-8-3**
TEL：092-723-2515　FAX：092-752-1268
URL:https://www.fukuokabank.co.jp

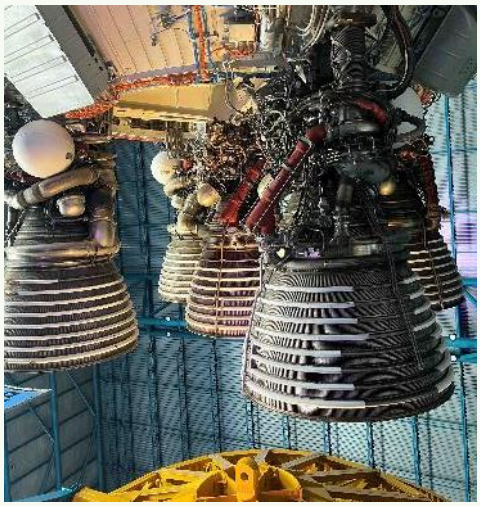
福岡貿易会会員リレーエッセイ

株式会社やまやコミュニケーションズ
代表取締役社長　山本　正秀 氏

「スペース X　～ロケット打ち上げ見学～」

【NASA のケネディ宇宙センター】

　先月、アメリカのフロリダ州オーランドを訪問しました。オーランドから車で 1 時間程度のところに NASA のケネディ宇宙センターがあります。WEB サイトで調べたところ、ちょうどスペース X のロケット打ち上げが見学できるということ。これは貴重な機会と、早起きして見学に行ってきました。



　ケネディ宇宙センターは、ロケットの開発・製造や宇宙飛行士の訓練、実際のロケット打ち上げなどアメリカの宇宙開発の拠点となっていますが、観光客向けの施設も充実しており、アポロ計画で利用された巨大ロケット（サターン V）やスペースシャトル・アトランティス号などの本物も見ることができます。

【ロケットの打ち上げ見学】

　今回、見学できたファルコン 9 ロケットは、テスラ CEO でもあるイーロンマスク氏によって、2002 年に設立された企業スペース X の主力ロケットです。当初は打ち上げ失敗も多かった同社ですが、わずか 20 年余りで、世界の宇宙産業の構造そのものを塗り替えようとしています。

　そして、実際の打ち上げ見学です。打ち上げまで 1 時間以上前から、見学の場所取り（観覧席）するのですが、待っている間にも打ち上げ施設の様々な解説やロケット打ち上げのプロセスなどが説明されるので退屈せず、

大きなモニターでカウントダウンや打ち上げ準備状況をリアルで見学できます。

いよいよ打ち上げカウントダウン。10 秒前から見学者全員でカウントダウン！実際の打ち上げ場所は見学席から数キロ離れていますが、実際にロケット点火されると巨大な炎が見え、数秒後に地響きとロケットの轟音が聞こえてきます。徐々に高度を上げていくロケット。青空の中にあっという間に消えていきますが、ロケットに搭載されているカメラ映像をモニターで地球から離れていく様子を見ることができます。

わずか 2 分半後には、地球周回軌道に到達し、下部の第一段ブースターと上部が切り離されます。で、なんと下部第一段ブースターは、それから自律的に地上に戻ります。その模様もモニターに映し出されます。徐々に地面が近づいてくるのをモニターで確認しつつ、空を見上げるとロケットが肉眼で見えます。そして残りの燃料を最大噴射して、急激に速度を落としたかと思うと、まるで誰かがロケットを元の場所に置いたかのように、打ち上げ場所にストンと戻ります。これがなんと打ち上げから約 8 分後のこと。

いとも簡単にロケットを打ち上げて、しかも戻って来るというリアル。たった 8 分間の出来事でしたが、これ程衝撃を受けたこともないかもしれません。しかも、この打ち上げは、2025 年 24 回目とのこと。年間 60 回以上打ち上げを予定しているらしいです（スペース X のみの回数）。年間数回の打ち上げに留まる我が国と比較すると大きく水をあけられているのは間違いないのですが、しかも民間企業がやっているというのもアメリカの奥深さを否応なしに感じます。

【スターリンク計画とその未来】

スペース X はもともと火星移住を実現するというヴィジョンで設立された会社です。その目的が実現するかはわかりませんが、現在、スターリンク計画が進行中で既にその通信サービスを利用できます。これは、数千機の低軌道衛星を用いて、地球上のほぼ全ての地域に高速・低遅延のインターネットサービスを提供することを目的としており、地上インフラが脆弱な山間部や低開発地域でも通信サービスが利用できます。

戦時下のウクライナ軍も利用しており、アメリカがこのサービスを遮断した場合のリスクなども報道されています。分断が進む最近の世界情勢ですが、このような社会インフラが世界の連帯に貢献することを願っています。

私からのリレーエッセイのバトンは、株式会社トクスイコーポレーションの徳島建征会長にお渡しします。徳島会長、どうぞよろしくお願いいたします。

株式会社
やまやコミュニケーションズ
代表取締役社長
山本　正秀

〒811-2418
福岡県糟屋郡篠栗町彩り台 1-1
TEL：092-652-2202　FAX：092-652-2218
URL:https://www.yamaya.com

福岡貿易会会員リレーエッセイ

丸紅株式会社　九州支社
九州支社長　花田　多雄 氏

「おみやげの達人になりたい」

【おみやげのルーツ】

　仕事柄、出張の機会が多いが、特に海外に出かけるとき、現地で会う方への手土産（おみやげ）を何にしようか、いつも悩んでしまう。必ずしも持参しなくてよいのだが、手ぶらだとなんとなく落ち着かない気持ちになるのだ。

　おみやげのルーツは諸説あるものの、「宮笥（みやげ）」といわれている。「神社に供えるためのもの」という意味で、神様への奉納品やお供え物が由来とされる。やがて、神社等へのお参りの記念に土地の産物を「土産」として持ち帰るようになった。江戸時代になると、旅の一般化により、各地の名産品を持ち帰る「土産文化」が広まった。明治時代以降は、ビジネスや社交の場でも贈答文化が発展、訪問先にちょっとした贈り物を持参する「手土産」という形が一般化した。

【各地のおみやげ事情】

　このように、おみやげは日本独特の文化・風習として生活の一部になっているが、海外では食べ物の好みが大きく異なるので注意が必要だ。限られた経験に基づく主観的なものであるが、各地のおみやげ事情をまとめてみた。

＜台湾＞
　甘いお菓子が人気
　ハローキティグッズ
　（ご当地キーホルダー等）
＜タイ＞
　甘いお菓子が人気
　東京ばな奈や、コアラのマーチ等も喜ばれる
＜シンガポール＞
　甘いお菓子が人気
　たばこは持込禁止

キティちゃんは台湾で大人気

＜インドネシア＞
　豚肉成分は NG
＜インド＞
　食材の制限が多く、おみやげは要らないことも
＜アメリカ＞
　洋菓子（特にヨックモック等）が人気
　あんこ系は避けたい
＜ドイツ＞
　せんべい・あられ（柿の種や辛い味）が人気
　あんこ系は避けたい

わさび・抹茶味は海外でも人気上昇中

　大まかな傾向としては、アジアは甘いもの、欧米は辛めまたは塩気のものが人気。あんこ系は欧米では苦手な方が多い。意外な感じがするが、日本の洋菓子は国を問わずおいしいと評判で、迷った時は洋菓子がおススメ。ただ、最近はインバウンド復活や日本食ブームによって、あんこや海苔等を好む“通”も増えてきているようだ。

【海外の日本人に喜ばれるもの】

海外の日本人には、スーパーやドラッグストア等にある普通のお菓子・日用品・薬が喜ばれる。シンガポールの駐在員から、『埃っぽいので、アイボン（洗眼液）を』と頼まれたこともある。薬も現地のものは日本人には強すぎるそうで、日本の風邪薬や胃薬、目薬等は重宝される。

お子さんがいる場合は、ポケモン等のアニメキャラクターとコラボしたお菓子はポイントが高い。文房具（シャープペン、消しゴム、筆箱等）も結構喜ばれることも。週刊誌や文庫本も、ウェブで読めるとはいえ根強い人気がある。

シールやおもちゃはレアもの

日持ちがするからと佃煮や梅干し等を選びたくなるが、他の訪問者からも食べ切れないほどもらっていて、困らせてしまうことも多い。お酒やたばこも定番だが、持込禁止・制限があるので気をつけたい。

【いつかはお土産の達人に】

個人的な感想だが、海外の日本人に最も喜ばれるのは『辛子明太子』だと思う。持ち込めない国もあるし、冷凍・冷蔵品なので移動中に傷む恐れがある。保冷バッグに保冷剤を沢山入れて持参するのは大変だが、相手のパッと輝く笑顔を見ると持ってきてよかったと嬉しくなる。

人の好みは千差万別で海外ではなおさらだ。折角買ったのに表情が曇ると切なくなるし、できれば気の利いたものを選びたいが、正解はない。いつかはおみやげの達人になりたいと願っているが、なかなか遠い道のりである。

福岡は全国屈指のおみやげの宝庫で、辛子明太子をはじめ、老舗の銘菓から気鋭のスイーツ、ラーメン、お酒にお茶となんでも揃っていて、どれを選んでよいか迷ってしまうほどだ。もしかすると、福岡にいることが、おみやげの達人への一番の近道かもしれない。

このリレーエッセイのバトンを、高杉製薬株式会社の高杉義明社長におつなぎしたい。高杉社長、よろしくお願いいたします。

Marubeni

丸紅株式会社　九州支社

九州支社長

花田　多雄

〒812-0011

福岡市博多区博多駅前 1-13-1-12F

TEL：092-452-8200　FAX：092-452-8213

URL:https://www.marubeni.com

ガンバってます、会員企業！
三宗貿易株式会社 様

オーガニック一筋、輸入販売、国内製造、そして、Japan Organic を世界に

【こだわりのオーガニックの食品を世界中から輸入】

私どもは 2009 年にオーガニック食品の輸入販売を始め、これまでにタイ、インドネシア、スリランカ、メキシコ、アメリカ、カナダ、イギリス、ドイツ、フランス、オーストリアから輸入し、全国のお客様にお届けしてきました。

ブラウンシュガー1st 有機 EV ココナッツオイル

最も多く輸入している商品は有機エキストラバージンココナッツオイルです。販売者が株式会社ブラウンシュガー1st で私どもは輸入者としてタイメーカーから直接輸入しています。オーガニックココナッツオイルを製造している工場で、搾油から瓶詰、日本語ラベル貼りまで行い、最終販売形態で日本に輸入しています。信頼できる工場との協力で、2013 年の発売以来、継続してお客様に喜んでご利用いただき、ココナッツオイルの No.1 ブランドに育てていただいたと自負しています。

【オーガニック食品を国内製造】

私どもは貿易商社ですが、実はユニークなオーガニック食品の国内製造もおこなっています。最初に製造販売した商品は有機レモネードです。当時、市場に出回っている

タイの工場のヤードに搬入された有機ココナッツと私

オーガニックの炭酸飲料はドイツ、フランス、イタリア、アメリカの各 1 社計 4 社しかありませんでしたので、わが社の有機レモネードは国産初、世界でも 5 番目の商品でした。

**国産初の
オーガニック炭酸飲料
「有機レモネード」**

イタリア・シチリア産の有機レモンストレート果汁と有機アガベシロップを取り扱っていたので、これを混ぜて炭酸を入れたら美味しい有機レモネードができるはずと考え、製造してくれる工場を全国で探しました。

ところが、日本で販売されているオーガニックの炭酸飲料は存在しなかったので、

アガシシロップの工場に搬入されたアガベ

当然、そんな商品を作れる工場はありませんでした。そして、見つけたのが島根県のさんべ食品工業株式会社でした。さんべ食品さんは有機 JAS 認証を取得し、オーガニックのジャムを作っていました。オーガニックのジャムを作れる工場は他にもあったのですが、さんべ食品さんはオーガニックではない炭酸飲料も作っていました。同社はもともとラムネ屋さんだったので、炭酸飲料の製造装置を保有していたのです。

そこで、さんべ食品さんに電話して、私どもから有機レモン果汁と有機アガベシロップを供給するので、有機レモネードを作れませんか、有機認証機関に確認していただけませんか、とお尋ねしました。さんべ食品さんはジャムの製造装置は有機 JAS 認証を取得していたので、取得している有機 JAS 認証を炭酸飲料の製造装置に拡大すれば可能なはずでした。見事、私の読みは的中し、さんべ食品さんから有機レモネードは製造可能とのご回答をいただきました。そして、国産初の有機レモネードが誕生しました。

メーカーさんも気が付いていなかった有機炭酸飲料ですが、現在は有機ジンジャーエールも販売しています。オーガニックの炭酸飲料 2 アイテムは、高級スーパーでも販売していますが、ホテルやレストランなどで多くご利用いただいています。

【香港、中国、そして、アジア、世界へ】

世界のオーガニック食品・飲料の市場は、アメリカやヨーロッパのメーカーの商品が中心です。日本で販売されている欧米のオーガニック商品が、日本のみならず、アジアでも販売されています。しかしながら、日本にも素晴らしいオーガニック商品はたくさんあります。私どもも炭酸飲料だけでなく、有機ゆず茶、有機生姜茶も発売し、商品の幅を広げています。ジャパンブランドをオーガニック食品の世界にも広げられるよう、今後は輸出にも力を入れていきたいと考えています。

国産の有機生姜で作った有機生姜茶

有機生姜農家の皆さんと

sansoboeki

三宗貿易株式会社
代表取締役
渡辺　久也

〒814-0005
福岡市早良区祖原 14-20
TEL 092-841-3010　FAX 092-985-5114
URL www.sansoboeki.organic

RKB 毎日放送、下田文代リーダーズストーリー出演

公益社団法人福岡貿易会　専務理事　平塚　伸也

＜福岡で活躍する経済界のリーダー＞

RKB 毎日放送で毎週月曜日午後 5 時から放送されている「下田文代リーダーズストーリー」という九州、特に福岡で活躍する経済界のリーダーをゲストに招き、今を生きるリーダーたちのこれまでの人生、そしてこれから拓く未来のストーリーを語るというラジオ番組で、最初に道永会長が出演なさったのを皮切りにご縁を頂戴し、三井物産株式会社当時九州支社長の中村隆三氏(現ロイアンドカンパニー代表取締役)、私、本多機工株式会社代表取締役社長の龍造寺健介氏、津田ホールディングス代表取締役の津田鶴太郎氏、株式会社インターナショナルエアアカデミー代表取締役会長の永江静加氏、株式会社ケアリング代表取締役社長の中尾光明氏、三井物産株式会社九州支社長の三井高輝氏が夫々番組出演しました。

この他にも当会と所縁のある各社トップの皆さんも多数出演なさっており、各回ともに大変興味深いお話をしていらっしゃいますので、まだ聴いてらっしゃらない方はぜひ聞いてみてください。

○ 出演者一覧（音声を聴くことができます）

出演日	登壇者	音声リンク	QR コード	出演日	登壇者	音声リンク	QR コード
2024 年 9 月 16 日	道永会長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/f22ad8b1-f7b-b455-8915-f7f1f1f74b7c?utm_source=1		2025 年 5 月 26 日	永江会長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/c2d07114-92fc-4a94-94f0-94b9-2e117c?utm_source=1	
2024 年 9 月 23 日	道永会長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/d1f08c1d-b4fb-4ff0-97f1-b2d9219d1d1c?utm_source=1		2025 年 6 月 2 日	永江会長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/e2e7454b-a1ce-4ac5-bd07-1bf82341f7aee?utm_sou	
2025 年 2 月 3 日	中村元支社長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/9c2e34f8-3798-4495-8c45-de0b3a75115e?utm_source=1		2025 年 8 月 4 日	津田社長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/45010fa1-002d-48fb-a79f-c7eee9f06597?utm_sou	
2025 年 2 月 10 日	中村元支社長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/be135f50-f668-4e00-a009-e3d212a4eae4?utm_source=1		2025 年 8 月 11 日	津田社長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/7f4398e4-7e52-44e6-8e46-39e2532d66b0?utm_sou	
2025 年 4 月 14 日	平塚専務理事	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/6f80ee09-b7ac-4d14-bce9-b981e65e8e15?utm_source		2025 年 8 月 18 日	中尾社長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/c3362f05-446e-446e-bb4c-0fe0e45d3ba3?utm_sou	
2025 年 4 月 21 日	平塚専務理事	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/9ee34e30-773c-4a21-b7b2-d6d1e1f2fe37?utm_source		2025 年 8 月 25 日	中尾社長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/c2edf5b4-213a-4849-a997-7f5b8f027e57?utm_sou	
2025 年 4 月 28 日	龍造寺社長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/8bf6fcd06-df03-4974-b736-37ad051633667?utm_source		2025 年 9 月 15 日	三井支社長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/e5ad19d0-c975-431b-b2d7-6e91dc0ce1357?utm_sou	
2025 年 5 月 5 日	龍造寺社長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/67b227fe-83e8-4503-94d0-dceb111d4f04?utm_source=		2025 年 9 月 22 日	三井支社長	音声はこちらを クリック↓ https://radiko.jp/podcast/episodes/5497ffe59-23b2-48cb-bcf61-7ee6d865a8b7?utm_sou	

コラム「貿易ニュース今昔物語」②

公益社団法人福岡貿易会　専務理事　平塚　伸也

皆さんこんにちは！

前号から連載を開始した福岡貿易会に残る古い機関誌から、昭和や平成の時代を振り返る興味深い記事をご紹介していきます。

まずは日本の戦後復興を米紙がどのように伝えていたのか記事がありました。

1961(昭和 36)年 1 月 10 日発行福岡貿易月報第 26 号より

米紙の論評する**日本経済の成長率**

在米日本大使館の報告によると、11 月 7 日付ワシントンポスト紙が掲載した日本経済の成長率についての論評の大要は次のとおりである。

日本は国際的な経済成長の競争では殆んどの観点から見ても第 1 位となつている。

この人口過剰の島国のブームは、最近米国への輸出が停滞しているために多少速度をゆるめてはいるが、その成果は依然として注目すべきものがある。過去 5 年間にわたつて米国の全生産高は 27％上昇したが、日本の全生産高は 40％上昇した。鉱工業生産は 1956 年に 23％、1956 年(筆者注：1957 年の誤植と思われる)に 16％、1958 年は米国の景気後退のため 1％、1959 年には 23％と上昇し、本年中頃には昨年に比べて 24％増の割合で上昇を続けている。この期間を通じて鉱工業生産は米国で 1/7 倍増えたのに比べ日本では 2 倍以上に増えている。日本はこの”take off”段階に入る時に次のような偶然的な要素に幸いされた。すなわち、大量の米国からの援助は戦後の日本産業を独り立ちさせ、朝鮮戦争はこの島国の産品に対する需要を増大させ、スエズ運河の閉鎖は日本の輸出に対して大きな刺激となつた。最近数年間で日本はこのような偶然的な要素を必要としなくなつた。

同国は生産高中驚くべき割合を拡大生産投資へ向けている。現在米国で 15％である投資率は日本では 27％に達している。更に西欧方式と全く異なつている点は、日本の投資の半分以上は自己貯蓄から出ていないで銀行貸出にたよつている事実である。しかし日本は十分な剰余生産の要素、ことに労働供給が豊富であるためにほとんどインフレをひき起していない。消費者価格は 1946 年から 1954 年にかけて 6 倍近くにも上昇しているが、その後は 10％しか上昇していない。同時に日本の上昇しつつある生活水準は、史上初めて耐久消費財に対する基本的な国内市場を提供するようになつた。ラジオ･TV セット、電気洗濯機、更に自動車が輸出用だけに作られる時代はすでに過ぎ去つている。これに加えて日本の生産者は新しい戦後の技術を取り入れ、広範囲に亘る近代化に乗り出している。低賃銀と共にこれは輸出増大に対する大きな要因となつている。日本は石油、鉄鉱石、屑鉄、パルプ、綿花および羊毛をすべて輸入に頼つており、1954 年から 1959 年にかけて輸出は 2 倍以上に増大し、輸入は 50％しか増大しなかつたにもかかわらずまだ全体としてそのギャツプは埋まつていない。このギャツプは米国政府の支出によつて十分に埋められてきたが、米国の国際収支の悪化は米国政府の支出の切下げを要求している。

しかしながら、日本には相当の余裕がある。同国の外貨準備高は、1957 年に 5 億ドルに落ちたものが現在では 17 億ドルとなつている。この上昇が続けば日本は 1962 年末までに現在課している厳しい輸入制限は大部分除去できるようになろう。

この素晴らしい成果にもかかわらず、日本はまだ相当の時間を要する。個人所得は年 300 ドル程度であり、工場勤労者の平均月収は約 56 ドル、都市家族の月収は 96ドル程度である。公式には失業率は 1％強であるが、10 人の中 1 人以上は半失業の状態にあり、パートタイムで働いていたり、無収入で家族労働に従事していたりする。農業は日本の半失業者の予備軍の最たるものであり、1 千万人すなわちほとんど 3 人の中 2 人が無収入で家族の田畑で働いている現状である。

この論評、どうでしょうか？前半では日本経済の目を見張る復興や投資効率の高さを褒め称え、戦後の日本人の生活レベルの向上を高く評価しています。一方で結びに書かれている「半失業者」に関する記述には当時の世

相からしても「うんうん」と頷いて読んでいられない気がします。因みに 2025 年 7 月時点での我が国の外貨準備高は 1.3 兆ドルを超えています。

という米国人から見た日本がそのように論評されているのに、ほぼ同じ時期に香港を訪れた日本人は次のように香港のことを書いています。

1961(昭和 36)年 3 月 10 日発行福岡貿易月報第 28 号より

-随筆- 香港見たまま（福岡市産業局商工貿易課 尾花剛課員）

九龍からフェリーで香港島に向かうとき、すばらしい高層ビルの林立する中で特に目を引くのは、香港上海銀行を中央に、両側にチヤーター ド銀行、中国銀行をひかえた威厳ある三つのビルの姿である。この香港のビジネス街の中心である中国銀行のすぐ横に、現在、高層ビルが新しく建築されている。聞くところによると、外人専用のデラツクスホテルが建てられるのだそうである。香港島の中心部であるクイーンスロードだけでも、他に3〜4 ヶ所建築工事がなされているのを見かけたし、又九龍側でも、中心部に 30 階建という香港一の高層ビルが新築されているのを見かけた。もともと、そういつた中心街に土地が空いているはずはなく、前の古いビルをとりこわして新築しているわけであるが、それも前のビルが老朽化したからではなく、地価が高いため低いビルではもつたいないというわけで、高いビルに造り変えられているのである。このビル建築は、昨年来、フイリピンその他民族運動の激しい東南アジア諸国から排斥され、香港に逃入して来た華僑資本のよき投資先となつている。投資した資本の償却は約 5 年であるといわれる。租借地の中共返還を 37 年後にひかえている以上、投資された資本は短期間に回収されなければ安心できないというわけだ。

華僑資本のもう一つの投資対象は香港の地場工業である。工業といつても水が少なく、土地が狭く、原材料も産せず、ただ労働力だけ豊富な香港では、二次製品を生産する軽工業しか成立しない。年々10 万をこえる人口がふくれつつあるときては、政府も何らかの雇用対策をとらざるをえないとみえて、九龍の官塘(クワントン)、荃湾(チユンワン)という所で山を削り海を埋め立て道路を整備し、けずりとつたあとには貧民を収容するためのアパートを建て、埋立地は工場用地として払い下げ、華僑資本の投資を勧誘して軽工業の振興を図つている。

こうした政府の努力もあつて、最近の香港人の生活は急速に向上してきたといわれる。治安も保たれ、夜街を一人歩きしても不安はない。

しかしながら、推定人口 400 万といわれる住民のすべてに働き口を与え、住居を与えるには、まだまだ多くの努力を要するようだ。人口過剰の現象はいたるところで見ることができる。日曜日の朝、早起きして、食事前に散歩でもと思つてビクトリアパークに出かけたところ、スポーツや散歩を楽しむ人たちで、広々とした公園がすでにいつぱいだつた。公園を出て 9 時半頃喫茶店にはいつたところ、これまた朝食をする人で満員だつた。香港では休む場所がないので、人と話をするために一日に 3 回も 4 回もお茶を飲むのだそうである。香港島でも九龍でも、ビジネス階を除いて 1 階が店舗で、2.3.4 階はアパートになつており、ぎつしり貧民がつまつているが、はいりきれずに軒下や歩道の上にゴザを敷いて住んでいる貧民をかなり見受ける。

東京の半分の広さで、資源もなく、大部分が山に覆われている土地に、400 万もの人間がひしめき合つているのだから、多少の及ばぬ点はあれ、とにかく自由港という制度を利用して、香港をこれほど繁栄させたイギリスは大したものだと思う。

気候よし、景色よし、買物よし、金を持つて旅行すれば面白いところである。

華僑資本による香港開発の状況は手に取るようにわかる気がしますが、後半の人口過剰以降のくだりは果たしてどうでしょうか？先の記事の米国から見た日本もこの日本から見た香港も同様に「上から目線」が強く入っているような気がしてなりません。

福岡貿易会では 9 月に発展目覚ましいグレイターベイエリアを視察してきた報告も本号の冒頭に掲載しておりますので、是非併せてご一読ください。現在の香港を中心とするグレイターベイエリアは、地域開発の面でも新しい技術開発でも、また経済全般でも日本をはるかに凌駕する領域にあり、学ぶべき点も多くあると思えて仕方ありません。

次回もまた興味深い記事を見つけてきます。乞うご期待！

新 会 員 の ご 紹 介

株式会社 Konzept-O（コンツェプト・オー）
代表者：取締役　永堀 佑樹
所在地：福岡市中央区大手門 1-9-11
107 大稲ビル 5F
TEL　：092-401-1232
Email　：nagahori@konzept-o.com
URL　：https://konzept-o.com/
主要業務：
【貿易】
欧州・中東に特化した(1) 市場調査、(2) 営業/仕入れ、(3) マーケティング
【プロモーション】
漫画やインスタグラム、サイト作成によるブランディング支援

当社の特色：
2021 年設立。欧州滞在歴の長い社員を複数抱える欧州エキスパート。ドイツの床材、大阪万博 UAE パビリオン向け建築資材など、現地サプライヤーとの直接交渉を得意とする。大学機関や欧州進出日系企業などの漫画・メディアを用いたブランディングも自社でおこなう。

◆◇◆◇◆◇